様式1

令和 5 年度　学校評価表

令和5年9月5日

学校教育目標	一生懸命がすばらしい　～夢と志を抱き，仲間とともに，主体的に生きる子どもの育成～

a　ミッション	●主体性と規範意識を身に付け，心を育てる小中連携教育の推進	a　ビジョン	●周りから応援される生徒，他校から目標とされる学校 ・夢や志を抱き，自己肯定感を持って仲間と力を合わせて主体的に学ぶ生徒 ・生徒の夢の実現を後押しできる専門性と人間性を兼ね備えた教職員 ・挨拶・歓声・歌声が響き渡り，生徒・保護者・地域が自慢でき誇りたくなる学校

尾道市立栗原中学校

評価計画						自己評価					学校関係者評価				改善計画
	b 中期経営目標	c 短期経営目標	d 目標達成のための方策	e 評価指標	f 目標値	7月 g 達成値	1月 g 達成値	h 達成度	i 評価	j 結果と課題の説明	k 二次評価 イ	ロ	ハ	l コメント	m 改善案
グローバル社会を生き抜く力の育成	学力の向上	意欲を持ち，学習に主体的に取り組む生徒を育てる。	（１）道徳科を中心とした授業改善を図ることを通して，主体的に学習に取り組む態度を涵養する。 （２）ＩＣＴを効果的に活用することを通して，思考力，判断力，表現力等を育成する。 （３）授業での振り返りの積み重ねを通して，学習内容の定着を図る。	（１）①生徒アンケート〔1～3〕の肯定的回答 （１）②保護者アンケート〔1･2〕の肯定的回答 （２）①生徒アンケート〔4〕の肯定的回答 （２）②AiGROWによる「表現力」の数値 （３）①教職員アンケート〔4･5〕の肯定的回答 （３）②生徒アンケート〔5･6〕の肯定的回答 （３）③保護者アンケート〔3･4〕の肯定的回答	（１）① ８５%以上 （２）② ８５%以上 （２）① ８５%以上 （２）② ０．５７以上 （３）① １００% （３）② ８５%以上 （３）③ ８０%以上	（１）① 84.8% （２）② 63.5% （２）① 79.3% （２）② 0.58 （３）① 93.8% （３）②		（１）① 99.8% （２）② 74.7% （２）① 93.3% （２）② 101.8% （３）① 93.8% （３）② 91.6% （３）③ 62.5%	（１）① B （２）② C （２）① B （２）② A （３）① B （３）② B （３）③ C	（１）生徒アンケートでは肯定的回答が84.8%と，昨年度よりも上回り，どの学年も主体的に学習に取り組んでいることがうかがえる。課題としては，「難しい問題や課題に対して，あきらめずに取り組んでいる」の項目が79.9%と目標値に達していない。また，「意欲的に学習に取り組んでいる」の生徒の肯定的回答が86.8%に対して，保護者の肯定的回答が61.0%と低い。学校の取組や生徒の頑張りをしっかりと発信していく必要がある。 （２）生徒の「ICTを効果的に活用している」の肯定的回答は79.3%であった。教職員の「ICTを活用している」の肯定的回答が83.3%であり，「思考力・判断力・表現力等を育成する」ために，どうICTを活用するのかを改めて全体共有する必要がある。また，AiGROWによる調査の結果は0.58であり，昨年度の0.57よりも数値が向上している。行事や授業の中で発表の場を意図的に設けた成果ではあるが，ICTとの関連が弱い。 （３）「振り返り」について，教職員アンケートでは91.7%と意識して取組ができているが，振り返りが学力の定着につながっていると実感できている生徒は83.2%，保護者は51.5%と差があり，取組を成果に結びつけていく必要がある。また，「自己表現力」に係る項目において，。教職員は95.8%の割合で取り組んでいるが，生徒の肯定的回答は72.0%，さらに保護者の肯定的回答は48.5%にとどまっている。	○			生徒アンケート・保護者アンケートは，「あてはまる」等の感覚的な評価でなく，本来は各段階の評価基準が示されていないと評価判断ができない。観点を含めて吟味していただきたい。 アンケートは全般的に保護者の点数が低い傾向にある。情報や実態把握が不足している層に対するアンケートでは，ベンチマークが曖昧なためバイアスがかかり，事実とは異なる結果につながりやすい。質問を変える，質問の取り方を変える等の改善が必要であると思う。 各種学力調査の結果からも，課題を認識していると思う。取組が学力の定着につながるよう，期待している。 ICT機器を使うメリットを先生自身が感じた上で，その必要性を子供たちに浸透させてほしい。	（１）各教科の導入段階や単元のまとめの時間をうまく活用して，正答率の低い問題に挑戦させる。特に，小集団での取組を意識させ，協働的な学びを行っていく。 （２）ICT研修を計画的に実施し，ジャムボードを活用して，いかに思考力等の育成につなげることができるのかに焦点を当てて研修していく。 （３）全教科で「振り返り」の行い方を共有し，自己表現力の育成につなげていく。 また，各アンケートの項目や実施方法について検討し，必要に応じて改善を図る。
	豊かな心の育成	夢や志を明確にもち，周りから応援される生徒，仲間を大切にし人の痛みがわかる生徒を育てる。	（１）組織的な生徒指導の推進のより，自己指導能力の育成を図る。 （２）自己肯定感を育み，いじめを生まない望ましい学級・学年集団づくりを進める。 （３）キャリア教育を充実させ，夢や志を明確にもたせる。	（１）①生徒アンケート〔9～11〕の肯定的回答 （１）②保護者アンケート〔8～10〕の肯定的回答 （１）③教職員アンケート〔7～10〕の肯定的回答 （２）①生徒アンケート〔12～16･19〕の肯定的回答 （２）②保護者アンケート〔11～14〕の肯定的回答 （２）③教職員アンケート〔11･13〕の肯定的回答 （３）①生徒アンケート〔7･8〕の肯定的回答 （３）②保護者アンケート〔5～7〕の肯定的回答 （３）③教職員アンケート〔6〕の肯定的回答	（１）① ８５%以上 （１）② ８５%以上 （１）③ ８５%以上 （２）① ８５%以上 （２）② ８５%以上 （２）③ ８５%以上 （３）① ８５%以上 （３）② ８５%以上 （３）③ ８５%以上	（１）① 83.4% （１）② 66.2% （１）③ 81.3% （２）① 83.8% （２）② 68.9% （２）③ 87.5% （３）① 78.4% （３）		（１）① 98.1% （１）② 77.9% （１）③ 95.6% （２）① 98.6% （２）② 81.1% （２）③ 102.9% （３）① 92.2% （３）② 66.0% （３）③ 93.2%	（１）① B （１）② C （１）③ B （２）① B （２）② B （２）③ A （３）① B （３）② C （３）③ B	（１）特に課題のある項目として，「気持ちの良いあいさつ」が挙げられる。生徒の肯定的回答は75.7%であるが，保護者の肯定的回答は59.7%。教職員の肯定的回答は54.2%である。学校だけではなく地域でも主体的にあいさつができる生徒を育成したい。あわせて，「学校や社会のルールを守っている」の項目において，生徒の肯定的回答は94.7%であるが，保護者の肯定的回答は61.6%である。地域でも信頼されるよう，改めて規範意識の育成に重点を置く必要がある。 （２）「いじめ」について，生徒の「いじめはいけないと思う」の肯定的回答が95.6%と数値的には高いが100%ではないこと，そして保護者の「栗原中学校にはいじめを許さない風土がある（取組が充実している）」の肯定的回答が48.5%と低いことが課題である。また，生徒の「自分にはいいところがある」，「学級や部活動で役に立っていると感じる」の割合が低い。自己肯定感を育むための集団づくりが急務である。 （３）生徒の「将来の夢や目標，志をもってる」の肯定的回答が76.2%であり，目標値を下回っている。保護者の「お子さまと将来（夢・進路）のことについてよく話している」の肯定的回答も70.2%である。家庭を巻き込んだキャリア教育の充実を図り，生徒に早い段階から夢や志をもたせる必要がある。	○			「生徒指導通信」の定期的な発行は，保護者との情報共有や学校の方針の周知という意味で，評価できる。 保護者が「栗原中学校はいじめを許さない風土がある」というの認識を持つほどの情報量がないように思う。 保護者としては，わが子から聞く学校の雰囲気がすべて，という感じになるので，わが子の周りにいじめがないなら，たまたまそうなんだ，ぐらいの認識になるかもしれない。 「いじめはいけない」と思っていない生徒が何を考えているのか，自由記述欄を設けるといいかもしれない。 「充実」「集団づくり」「持たせる必要」等，目標が少し曖昧な項目については，いつまでに何をどのくらいにというように具体的なアクションプランを作成することで，取組の進捗や達成度合いがわかりやすくなると思われる。	（１）委員会活動や部長会の活性化を図り，「気持ちの良い挨拶」について考える場を設け，学校外での実践につなげていく。また，道徳科の充実を図り，きまりやルールの意義について考えさせていく。 （２）いじめに係るアンケート内容の工夫を行うとともに，「絶対に許されないものである」という風土を醸成していく。また，学校の取組を丁寧に保護者に発信していく。 （３）総合的な学習の時間の指導計画や内容等について保護者に示しながら，家庭と一体となったキャリア教育を推進していく。保護者にも進路に係る情報をこまめにしていく。
	魅力的な学校づくりの推進	生徒が栗原中学校に愛着と誇りを持ち，地域や保護者から信頼される学校づくりを行う。	（１）生徒の学力の向上に向けて，教員の授業力向上を図り，授業改善を行う。 （２）系統性ある取組を行うために，小中連携教育の充実を図る。 （３）魅力的な行事等を創造するとともに，学校だよりやHPを通して，学校の情報を積極的に発信していく。	（１）教職員アンケート〔1～3〕の肯定的回答 （２）①毎月１回以上の小中連携会の実施 （２）②教職員アンケート〔12〕の肯定的評価 （３）①生徒アンケート〔17･18･20〕の肯定的回答 （３）②保護者アンケート〔15･16･18･19〕の肯定的回答	（１） １００% （２）① １００% （２）② １００% （３）① ８０% （３）② ８０%	（１） 88.9% （２）① 100% （２）② 70.8% （３）① 77.6% （３）② 79.9%		（１） 88.9% （２）① 100% （２）② 70.8% （３）① 97.0% （３）② 99.9%	（１） B （２）① A （２）② C （３）① B （３）② B	（１）「授業改善は進んでいると捉えている」割合は91.7%，「研究主題を意識して授業づくりに取り組んでいる」割合は91.7%と改善傾向にあるが，「ICTを活用している」割合が83.3%と目標値を下回っていることが課題である。ICTを使用することが目的ではなく，「思考力・判断力・表現力等」の育成に向けて効果的に活用していきたい。 （２）毎月１回の生徒指導主事間の連携，学期に１回の教頭間連携は計画的に実施できている。夏季休業中には，校区内の小中学校合同で生徒指導に係る研修会を実施した。継続して取り組み，系統性ある指導体制を構築していく。課題としては，教職員アンケートにおいて「小中連携教育は充実している」と捉えている割合が70.8%と低いことが挙げられる。小中連携の見える化を図るとともに，研究部を巻き込んだ取組を推進する。 （３）教職員の「学校には自慢できることがある」と捉えている割合が87.5%，「栗原が好きで愛着と誇りをもっている」割合が95.8%と，目標値に達している。課題としては，生徒の「学校には自慢できることがある」割合が74.9%，「栗原が好きで愛着と誇りを持っている」割合が74.0%と，あまり高くない。また，「栗原中学校は信頼できる」と捉えている割合が75.7%であり，より積極的に情報を発信しながら，保護者と一体になった取組を推進していく。	○			ICTの活用は手段であり目的ではないので，今一度ICTを活用することで何が得られるのか，なぜ活用しないといけないのかを明確化する必要がある。 小中連携の取組は評価できるが，担当者の仕事に留めず，全教員が経験と成果を共有できるようにしたい。また，成果を積極的に広報したい。 先生方が業務改善に向けて意欲的に取り組まれていることがよくわかった。先生方と同様に，生徒や保護者が栗原中に愛着と誇りを持つためには，各々個人差はあるが，学生生活に充足感が得られることが大事だと思う。	（１）ICTの活用について，校内研修等で改めてICT活用のメリットについて共有を図る。使用率の向上のみを目指すのではなく，思考力等の育成に向けていかに効果的に活用するかに焦点を当てて研修していく。 （２）まずは相互の研究会に参加する。また，研究会以外においても，日頃から授業参観や校内研修への参加等を行い，担当者以外の教員が参加しやすい体制を確立することで，全員の意識の向上に努める。 （３）道徳科を中心に郷土への愛着と誇りについて考えさせる。また，生徒会活動の活性化を図り，生徒中心の行事の創造を図っていく。
	教職員の働き方改革の推進	業務改善の意義を職員全体が共通認識し，積極的に取り組むことで，「本校で働いてよかった」と思える職員集団とする。	（１）働き方改革の意識向上 （２）超過勤務時間の削減	（１）①職員の働き方改革アンケートの肯定的回答 （１）②教職員アンケート〔14～17〕の肯定的回答 （２）超過勤務４５時間未満の完全実施	（１）① 80%以上 （１）② 80%以上 （２） １００%	（１）① 87.3% （１）② 89.6% （２） 41.7%		（１）① 109.1% （１）② 112.0% （２） 41.7%	（１）① A （１）② A （２） D	（１）尾道市教育委員会が実施した「働き方改革アンケート」10項目の平均は87.3%で，昨年度同時期の69.7%よりも大幅に改善されている。課題としては，「生徒と向き合う時間が確保されている」の肯定的回答が72.7%で市の平均値を下回っていることである。 （２）超過勤務45時間未満の割合は，41.7%（4～7月）で，昨年度同時期の28.1%を上回っているものの，目標値を大きく下回っている。今年度，生徒指導対応で疲弊しないための未然防止の取組を充実させることと，各行事が通常に戻りつつある中で若手教員がいかに見通しを持って段取りよく業務を行うかが大きな課題である。	○			４５時間以上の超過勤務が相変わらず多いと感じる。日常の定型業務の効率を上げる，簡素化できるところは簡素化する等の取組が必須であるように思う。 教員間の打ち合わせや情報共有を，対面の会議ではない方法で行うなど，業務の合理化を進めるとよい。 改善がみられているとは思うが，まだ課題が多いように感じる。「生徒と向き合う時間が確保されている」という項目は充実していることが必要だと思う。	（１）１学期を終えての振り返りを行い，改めて業務分担の見直しを図る。その中で，２学期中にICTを活用したペーパーレス化の取組を進める。 （２）毎週水曜日の定時退校日の徹底を図るとともに，学年ごとに見通しを持って早期退校できる体制づくりを行う。

【自己評価　評価】
Ａ：１００≦（目標達成）　　Ｂ：８０≦（ほぼ達成）＜１００
Ｃ：６０≦（もう少し）＜８０　　Ｄ：（できていない）＜６０

【外部評価】　イ：自己評価は適正である。ロ：自己評価は適正でない。　ハ：わからない。